

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-330	22-312	慶應義塾大学 加藤眞三
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Analgesic effects of alcohol in adults with chronic jaw pain. 慢性顎痛を有する成人におけるアルコールの鎮痛効果		
<b>執筆者</b>		
Vitus D, Williams MK, Rizk M, Neubert JK, Robinson M, Boissoneault J.		
<b>掲載誌</b>		
Alcohol Clin Exp Res. 2022 Aug;46(8):1515-1524. doi: 10.1111/acer.14883. Epub 2022 Aug 22.		
<b>キーワード</b>	<b>PMID</b>	
アルコール、鎮痛、慢性疼痛、疼痛緩和	35989585	
<b>要旨</b>		
<p><b>背景：</b> 最近の文献ではアルコールの鎮痛作用が有望視されているが、慢性疼痛の状態によるアルコール鎮痛作用の潜在的な差異はよく理解されていない。そこで本研究では、アルコール鎮痛の潜在的な調節因子として慢性疼痛の状態を検討し、疼痛体験と感受性の複数の側面（疼痛閾値、疼痛強度、疼痛不快感、知覚的安心感）を区別した。</p>		
<p><b>方法：</b> 慢性顎痛のある社会的飲酒者（N = 19）と疼痛のない社会的飲酒者（N = 29）は、アルコール（目標 BrAC = 0.08g/dl）とプラセボの2つのテストセッションをカウンターバランスの順序で受けた。それぞれにおいて、咬筋への挿入部において圧力測定が行われた。アルコールの鎮痛作用は、飲料条件、圧力レベル（4、5、6 ポンドフィート[lbf]）、および慢性顎痛の状態（慢性痛対無痛対照）が、有害刺激後の定量的感覚検査指標および疼痛緩和評価に及ぼす主効果および相互作用を調べることによって評価した。</p>		
<p><b>結果：</b> 解析の結果、アルコール条件下では、疼痛閾値と疼痛緩和が有意に増加し、疼痛不快感と疼痛強度が減少した。慢性疼痛参加者は対照群よりも疼痛閾値が低く、疼痛強度と疼痛不快感の評価が高かった。アルコールと疼痛条件との相互作用は認められなかった。</p>		
<p><b>結論：</b> 以上の結果は、アルコールの鎮痛および疼痛緩和効果に関する実験的証拠を提供し、これらの効果が慢性疼痛の状態によって有意な差はないことを示唆する。痛みの状態にかかわらず、アルコール摂取によって痛みを自己治療している人は、危険な飲酒パターンに陥るリスクが高く、その結果、アルコールに関連した有害な結果を経験することになる可能性がある。</p>		